埼玉大学

会報 けやき会 2023

埼玉大学教養学部同窓会だより Vol.21

同窓会ならではの、ネットワークと人材を活かしたカリキュラム

リニューアルされた寄附講義

今や、教養学部の看板講義のひとつになった「けやき会寄附講義」。昨年後期に、リニューアル、さらにパワーアップして展開されました。学生の評判も良く、教養学部のみならず、他学部学生も多く聴講、埼玉大学全学の学生対象の講義となっています。

「けやき会寄附講義」とは

社会で活躍する同窓生（先輩）が、その実社会での経験を踏まえ、学生たちに社会人からの目線で講義するというもの。教養学部ならではの多岐にわたる人材が母校の学生たちの学びに寄与するという同窓会ならではの取り組み。今では大学の正規授業の一つとなっています。

グループディスカッション中の学生たち（一部画像を加工しています）

埼玉大学教養学部に、10年ほど前から作られた寄附講義が、2022年9月からリニューアルされました。

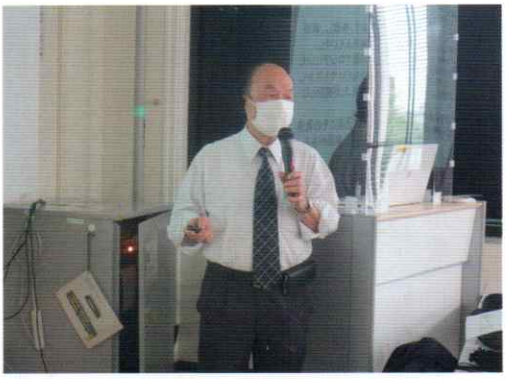
まず、シラバスにも書きましたが、教養学部の5つの「教育目標」を踏まえ、とりわけ教養学部らしい「グローバル人材の育成」という目標に合わせて、寄附講義では「グローカル（グローバルとローカルの双方）で活躍できる実践的な知識と能力の修得」を目指し、国内外の多様な文化や価値観を実際に理解して、各人の問題解決能力と表現力、発信力を高める実践的な場にしたいと考えました。

そういう意味を込めて、科目名は「国際社会の理解とキャリア形成」（Understanding Global Society and Career-Building）としました。

幸い、初年度にもかかわらず、104人の履修生が全学講義棟1号館401教室に集まって来ました。

学生の内訳は、教養学部54人、経済学部32人、教育学部18人で、教養学部の履修生が全体のほぼ半数（52%）、残りの半分を経済学部（31%）と教育学部の学生（17%）が占めており、全学的な性格を帯びています。

学年別では、4年生9人、3年生29人、2年生36人、1年生30人で、目下就職活動中の3年生だけでなく、1・2年生の参加者が予想以上に多いのに驚きました。実際1・2年生の意識は高く、3・4年生と同じか、



講師：赤津光一氏

あるいはもっと高いと感じました。

授業は全16回で、講師は12人。

講師：高木眞慈氏

そのうち卒業生が10人で、講師の年齢は30代の若手から40、50代、70代のベテランまで2世代半にまたがっています。講師の皆さんには、「もし自分が学生だったら聴きたいと思うような講義にしてください」とだけお願いしましたが、お蔭で12人が素晴らしい講義をしてくれました。実際、学生たちは自分の社会観や職業観がいい意味で変わり、講師の実体験に心を動かされ、教育的効果は予想以上でした。

学生たちのレポートを読むと、今の世の中を反映しているのか、仕事は辛いもの、社会人になることは苦しさの連続であるという先入見に囚われていたのが、どの講師も生き生きと人生を語り、仕事も楽しそうに話すので、まずそこに驚いたようです。

「この授業を受けて考え方が180度変わった」

（教育学部2年）

「講義を受け終わった今、ものの見方も就職に対する考え方も人生観も大きく変わったと実感している」

（経済学部2年）

「講師の方々のほとんどは、挑戦し、挫折を経験してきた人々だった。講師の方々の挑戦する姿勢を見て、挑戦して失敗することは大した問題ではなく、そこで諦めずにいかに努力を怠らないかが鍵になってくるのだという考えにたどり着くことができた」

（教養学部1年）

「本講義を受けたことで、自分から行動を起こして充実した有意義な人生を送りたいと思うことができ、このような心情の変化をもたらしてくれた本講義にはとても感謝している」

（教養学部2年）

「就活は大変で辛いものというイメージがありましたが、生き生きと働く先輩方の話を聞き、仕事や就活というものが自分のこれからを考えるキラキラとしたものだと思えるように変わりました」

（経済学部3年）

実際、講師のポジティブな姿勢、生き方に共鳴し、わずかな期間で行動を起こす学生も出て来ました。

具体的には、公務員講座に申し込んだり、国際交流の会に入って活躍したり、交換留学生に応募して、次年度希望する海外の大学を早々に決めたり、あるいは就活で12月中に内々定をもらう学生まで出て来ました。

授業は、4人の講義が終わると「グループディスカッション」を3回行いました。異なる学年、異なる学部でグループを作り、与えられたテーマに即して議論をまとめ上げる作業は、新鮮だったようで、非常に好評でした。

他方、外国の文化と社会を網羅することは不可能なため、代わりに毎週1回、「異文化」「比較文化」をテーマとする資料をオンラインで配信しましたが、これも好評でした。

また、副産物もいくつかありました。寄附講義は、講師の生きた実社会の話を通じて、キャリア形成として長い人生を考えさせることが狙いでしたが、学生たちにとっては、どうしても目の前にある「就活」が気になって仕方がありません。

そこで、けやき会が長年取り組んでいる「就活ゼミ」について紹介したり、株式会社マイナビに来てもらい、授業を早めに切り上げて、担当者に企業情報の検索方法について説明してもらったり、16人の卒業生に呼び掛けて「OB・OGとの交流会」という就職相談会を2月4日の土曜日に開催したりしました。

OBOGとの交流会

お陰で、学生からは次のような感想をもらいましたが、私は勲章だと思っています。

「この講義は、異文化理解からキャリア教育、就活支援まで、とても幅広い分野を題材として扱っており、自分が今まで受けてきた講義の中でも、最も特殊でありながら、最もおもしろく、最もためになる講義であったと感じた」

（教養学部1年）

次ページに、12人の講師の名前とタイトルを記します。

2022年けやき会寄附講義　講師の皆さんと講義テーマ

1．高田智之　　フリージャーナリスト、元共同通信記者（北京、上海特派員）
「愚鈍と挫折を肥やしに～私の仕事人生」

2．赤津光一（70独文）　元ジェトロ・ワルシャワ所長、
NPO法人フォーラム・ポーランド組織委員会委員など
「ポーランドでの仕事～知られざる親日的な国」

講師：真木紗仁亜氏と岡田会長

3．吉野 晃（80文人）　東京学芸大学名誉教授／社会人類学
「異文化を体得する：タイの山奥でフィールドワーク」

4．真木紗仁亜（20埼大大学院博士課程）　パキスタン研究者
「パキスタン・イスラム共和国（Islamic Republic of Pakistan）を知ろう
～女子教育問題、移民、イスラムを通して」

5．石澤和也（10国関）　株式会社クボタ／オンライン勉強会「さきたま塾」事務局
「私たちが埼玉大学の４年間で取り組むべき事」

6．齋藤長三（69独文）　元伊藤忠商事株式会社
「旅たち～ライン、テームズ、そして商人の港」

7．石原 裕（95国関）　千葉大学生活協同組合 専務理事
「埼玉大学での学びと、大学生協での仕事～みんなが主役であり、みんなが名脇役になる」

8．岡田大地（05埼大経済卒）　キヤノンマーケティングジャパン株式会社
「20代のうちに考えたい人生戦略～「個」を強くして生き残る」

9．香田寛美　　元春日部市役所部長、江戸千家渭白流茶道教授
「趣味は厳しく！仕事は楽しく！地域と共に生きる」

10．中川和広（04国関）　OPMAC（オプマック）株式会社
「ＯＤＡ（政府開発援助）業界で働く楽しさ・つらさ」

11．高木眞慈（18ヨ・ア文化）　株式会社リクルートスタッフィング
「教養を学ぶ意義～自ら考えて行動する人材になるために」

12．岡田道程（76哲思）　　共栄大学前副学長・名誉教授／哲学・倫理学・ドイツ語
「ドイツから学んだ日本の近代化～医学・科学・音楽等」

（敬称略）

会報　けやき会2023

目次

特集「リニューアルされた寄附講義」　1
会長あいさつ　4
学部長あいさつ　4
寄附講義・講師から　斎藤　長三氏　5
寄附講義・学生から　福田　椿　氏　高橋　岳杜氏　6
ホームカミングデー　7
教養学部の歩み　8
同窓生から　山野　清二郎氏　下斗米　千寿子氏　10
浦和フィル　13
草野球チーム　13
さきたま塾　14
就活ゼミ　16
けやき賞　17
川田先生祝賀　18
22年度　総会報告　19
23年度　総会のお知らせ　20

けやき会 会長あいさつ

けやき会　会長　岡田道程

2022年度は、新型コロナの流行3年目となりましたが、埼玉大学では最大限の注意のもと、対面授業が再開されました。オンラインから通常授業に変わり、学生も普通の大学生活を取り戻しています。

そんな中、同窓会のけやき会は、教養学部の協力と学部長・野中先生のバックアップにより、さまざまな活動を実施することができました。以下、そのご報告から。

まず、1年をかけて準備してきた新しい『けやき会名簿』第4版を4月に刊行しました。毎回、名簿は厚さを増しており、今回は約一万一千人程度まで会員が増えました。

7月には、2年間中断していた「総会」をオンラインで実施しました。

大学院生の中から、優秀な研究者を選んで「けやき賞」を授与する試みは、対象者を従来の2人から4人に拡大しました。

11月には、大学の学園祭（むつめ祭）に合わせて、「埼玉大学ホームカミングデー2022」が、大学と埼玉大学同窓会共催で開催されました。目玉になったのが、本学の同窓生で（株）クレディセゾン代表取締役会長CEO、林野宏氏によるご講演「21世紀の社会と経営」で、素晴らしい内容でした。

一方、9月からは、10年間続いた寄附講義の後を受けて、新たに「国際社会の理解とキャリア形成」がスタートしました。12人の講師（うち卒業生10人）が語る学生時代の思い出から、社会人になってからの苦労、現在の活躍の様子までリアルに語っていただき、100人あまりの学生に感銘を与えていました。

受講生は、教養学部の学生が約半数、経済学部と教育学部の学生が合わせて約半数で、文字どおり学部横断の特徴をもつユニークな授業となりました。

中でも、学生からの就職への期待と不安が強いことが分かり、途中「就活ゼミ」のチラシを配布したり、2月には、その延長線で「OB・OGとの交流会」（就職相談会）を実施したりしました。その日、卒業生と学生たちの個人面談が、夕方遅くまで続いていました。

その他にも、2か月に1回オンラインで開催される「さきたま塾」の同窓生によるプレゼンテーションが、丸3年続いています。

昨年は、初めての試みで、春に北浦和の埼玉県立近代美術館の見学会。夏には、広島研修旅行を少人数ながら実施しました。今年は、上野の国立博物館に勤務している同窓生がいますので、ここでもぜひ見学会を実施したいと思っています。

7月には、大学で総会と講演会を企画しています。皆さまとは、久し振りにお会いできることを楽しみにしております。

学部長あいさつ

教養学部長
人文社会科学研究科副研究科長
野中　進

私の学部長職も3年が経ち、この4月から最後の年となりました。「あと1年か」とさまざまな気持ちでふり返る春です。

ご存知の通り、この3年間、コロナ禍やウクライナ侵攻など世界的規模の事変が起こり、それらは本学にも大きな影響を及ぼしました。

2年間続いたオンライン授業にはよい点もありましたが、「キャンパスでの学びと交友」という大学生活でいちばん大切なものを学生から奪ってしまいました。

2022年度、ようやく「原則対面」に戻りましたが、全ての学生がスムーズに学生生活に戻れたわけではありません。それでも、多くの学生はこの2年間できなかったことを取り戻すように、熱心に学業と交友に励んでいるようです。行けなかった留学に再挑戦する学生もいます。

また本学では、坂井学長のリーダーシップの下、ウクライナの協定校から交換留学生を受け入れ、生活・就学面の支援を行ってきました。そのことはマスコミなどでも報道され、同窓会や一般社会からのご寄附をいただくこともできました。大学が社会的取組のハブになるということは重要であり、本学がそうした役割をいっそう積極的に引き受けていくことが期待されています。

この間、けやき会には就職支援と修学支援を軸に多大なご協力をいただいてきました。前者について言えば、つい最近（2月4日）も「現役学生と卒業生の交流の場」を設けていただき、多くの現役学生が卒業生の皆さんに就職活動や進路全般の相談をすることができました。このとき、個人的に強い印象を受けたのが、参加してくださった卒業生のほとんどが20～30代だったことです。岡田会長の下、けやき会の活動が多世代的になっていることを認識しました。

修学支援についても、学生用図書のための毎年のご寄附、教養学部から人文社会科学研究科に進学する学生への「けやき賞」など、手厚いご支援をいただいています。とくに「けやき賞」は枠を2名から4名に増やしていただきました。奨学金という実際的なありがたみもさることながら、学生たちが同窓会とのつながりを実感する精神的面も大きいと思われます。

けやき会の寄附講義について申し上げると、10年以上、栩木前会長に組織・運営をお願いしてきた「経済事情」が2022年度から岡田現会長による「国際社会の理解とキャリア形成」へとバトンタッチしました。後期の金曜3限に開講、教養学部以外の受講生も多いことなど、「経済事情」と同じで、教養学部の看板科目となっていくことでしょう。この場を借りて、岡田先生と講師の皆さまに深くお礼申し上げます。

けやき会のご発展をお祈りするとともに、今後も教養学部・埼玉大学との連携をますます深めてくださいますよう、お願い致します。

寄附講義レポート

講師を務めた同窓生から

「二つの旅たち」

けやき会寄附講義に参加して

教養学部第一期生　1969年卒
齋藤　長三

これから広い大きな海へ漕ぎ出す準備をしている皆さんへ「国際社会の理解とキャリア形成」というメイン・テーマのもと「旅たち～ライン、テームズ、そして商人の港」という題目で講義を行いました。これは大学生活を有意義に過ごし社会への「旅たち」の心の準備を促したものでした。

講義の前、教養学部長の野中進先生とお話ができました。国立大学では東京大学に次ぎ二番目に設立された埼玉大学教養学部は設立当初、草創期の暗中模索の時代から、其の後時代に即した講座の充実を図り、今は、厚みのあるしっかりとした講座が準備されているとの印象を受けました。

今回、けやき会会長の岡田道程氏より寄附講義への参加を促されました。私も喜寿を迎え、これまで経験知を積んできたものを次の世代に継承していきたいと思うようになり、この申し出を喜んでお受けした次第です。次の世代に希望を託し講義の場に立ちました。

私は七十年安保で学生運動が荒れ狂う1969年3月教養学部ドイツ文化課程を卒業し、4月伊藤忠商事株式会社に入社しました。

当時は「青田刈り」の時代で日本の一流企業が大学に来て会社説明会を行ってくれていました。大学側も一期生を社会へ送り出すにあたり旧制浦高の人脈を探り、浜中教養学部長を筆頭に陰に陽に応援してくれていたのではないかと思います。

入社後は一貫して機械部門に所属し1976年から2年間西独デュッセルドルフ（ライン川）に駐在しました。大学時代に勉強したハイゼンベルク（原子物理学者）、ハイデガー（哲学者）が1976年に亡くなり、ドイツの同じ空気感の中で感傷に浸ったことをいま思い起こしています。

引き続き1977年から4年間英国ロンドン（テームズ川）に駐在しました。エリザベス女王即位25周年、サッチャー保守党内閣の誕生などで新しい英国を予感できる改革が次々と実行されていった時代でした。

そして1994年から2年間、官民が共同して地方を活性化しようと組織された、自治省（現総務省）傘下の財団法人地域活性化センターに出向しました。一極集中で地方が崩れていく日本を再生しようとする政策「ふるさと創生」の一環として「アンテナショップ」「道の駅」構想に関与できたことは懐かしい思い出です。

2003年からは6年間デンマーク、コペンハーゲン（商人の港）に駐在しました。デンマークは人口580万人と小さな国ですが、アンデルセン、キルケゴール、ニールス・ボア、ヤコブセンなど特色のある文化を創出した人物を輩出した国です。

仁科芳雄、野口英世が若いころコペンハーゲンで学んでいました。デンマークはヴァイキングの国として有名ですが小さい国ながら気骨のある人物が多いように感じました。科学史の中で有名な話ですが、アインシュタインが「神はサイコロを振らない」と言ったのに対し、ニールス・ボアは「神に何をなすべきか、何をなさざるべきかを貴方が語るなかれ」と応酬しています。

これら11年にわたる海外駐在に加え、日本からのヨーロッパ、アメリカ、中近東、アジアへの海外出張は70回余に及びました。このような国際社会との接触を通してのキャリア形成で学んだことを以下書きとどめておきたいと思います。

一　イエス、ノーをはっきりと言おう。

二　国際語である英語を学び、相手国の文化を勉強する。そして英語で日本のことを語れるように。

三　何か一つ得意なものを見つけ、それを梃に点から線、面へと拡げていこう。

四　好奇心を失わないこと。いつも何かのきっかけは好奇心から始まる。

講義を終え、学生の皆さんからたくさんの感想、質問をいただきました。各人が問題意識を持ち講義に臨んでおり、講義のポイントをしっかり掴んでくれていたことが分かりました。

「外国に直接触れることの大切さ」「挑戦をすることによる失敗は勲章」「自分らしさを問い、きらりと光る個性を磨く」といったことが心に響いた、との感想が多く寄せられました。自信をもって大学生活を送ってもらいたいと思います。

ここ数年のコロナ禍で大学での学びの場、学生同士の人間的切磋琢磨の機会が失われてしまいましたが、今からでも決して遅くはない！学舎で友情の種を育んでほしい。

今回「旅たち」と称し人と人、物が行きかう「川」駐在地のライン川、テームズ川、「商人の港」を題名に掲げ学生時代の思い、伊藤忠商事時代の出来事を学生の皆さんに語り掛けてみました。この講義から何らかの「きっかけ」が得られれば望外の幸せです。

60年近く前、私は青年の志を胸にここ埼玉大学で学生生活を送り、新しい社会へ「旅たって」行きました。今、喜寿を迎え人生のファースト・ステージをしっかりと見つめなおし、次の世代に希望を託して、人生のセカンド・ステージへと「旅たって」行こうと思います。

最後になりましたが、今回このような講義の機会を与えてくれました野中学部長、岡田けやき会会長に感謝申し上げます。

当日、聴講に訪れた友人たちと。1期生の加藤基氏
齋藤長三氏、2期生の赤津光一氏、奥野昌宏氏

寄附講義レポート
受講した現役生から

寄附講義に参加して

教養学部　哲学歴史専修課程
芸術論専攻2年
福田　椿

現在、私は春休み中、2年生つまり春から3年生となり、刻々と近づいてくる就活について不安な気持ちがありますが、そのようなマイナスな気持ちしかないという訳でもありません。それは、けやき会の寄附講義である「国際社会の理解とキャリア形成」に参加して得られた、社会に出ることへのワクワクとした気持ちとこれから取り組む様々なことへのやる気に満ち溢れているからです。

本講義のように様々なキャリアを持った講師の方々のお話を聞く機会は今まであまり無かったため、それまでは就職に対して漠然とした不安を持っているばかりでしたが、講師の方々の失敗を糧に努力によって未来につなげていく姿勢に感銘を受け、失敗を恐れるのではなく、とにかく挑戦していくことが重要なのだと考えるようになりました。

また、今後の自身の目標を定めていくにあたり、講師の方々の具体的な経験の話はとても参考になりましたし、目先のことだけでなく、30年、50年先の未来も見据えて今自分が何をすべきか考えるべき、といったお話をされていたのもとても印象に残っています。

本講義は、何かの学問に属した勉強というのではなく、生活あるいは生き方に直結するような「学び」ができる場として、わたしたちに様々なことを教えてくれたと感じます。

教養学部は、分野にとらわれず幅広い内容の講義に参加できるのが特徴の学部でありますが、それは必ずしも学問分野に限った話ではなく、このような社会で役に立つような学びを扱う講義や、自分の身近で当たり前と思っていた事象について再考するきっかけになるような講義、実際に作品を作ってみる講義、などその多様さに驚かされます。特に、自分の意見や考えを求められるような講義は大変ですが、同時に自分の力を試すような感じがあり面白くもあります。

今は、3年生になる前の準備をしつつ、来年度もまた対面で講義が受けられることを楽しみにしています。

埼玉大学から世界を目指す
～諸先輩の背中を追って～

教養学部　1年
髙橋　岳杜

昨年4月に北海道より移り住んでから、埼玉大学での1年目の生活はあっという間に終わろうとしています。たくさんの新しい発見と出会い、失敗、知的好奇心を充足させる機会に満ちた極めて濃密な1年間でした。

とりわけ10月から2月にかけて開講された「国際社会の理解とキャリア形成」の講義は、他に類を見ないユニークさを兼ね備えていました。

毎回の講師が異なるだけでなく、それぞれが実に多様なバックグラウンドやキャリアを積んでこられた人生の先輩方ばかりです。

ファシリテーターの岡田先生による「講師自身が聴いて楽しいと思える講義」を軸に独創的な各々講義を展開してくださいました。特に私は外交官になりたいという夢を持っているので、そんな男にとって国際社会(異文化)を理解する力は必須です。海外を勤務地として、報道・貿易・文化人類学研究などに携わってきた方々から、生の体験談を直接聞く機会を得られた事はとても貴重な体験だったと考えています。

また、大学を卒業し、社会に出た後、いかに充実感を持って仕事に向き合っていくかを説いてくれた講師の方もいらっしゃいました。似たような話題が別の講師の口から複数回にわたって登場することもありましたが、そのような時もより多面的に一つの話題について考察を深めていくきっかけを得られたと思い終始積極的に受講できたと思っております。

また、この講義は聴きっぱなしでは終わりません。グループワークを通じ、口語のコミュニケーションによって活発な意見交換が促されました。あまり同世代の人たちと話すのが得意ではない私も、限られた時間の中で出来る限り実りあるディスカッションが出来るように、都度都度私にできる範囲での工夫を凝らすことを躊躇せず行うことができました。

同じグループのメンバーにも恵まれ、彼らと協働して毎回のディスカッションで必ず新しい発見を生むことができたのではないかと省察しています。

私が埼玉大学に出願するきっかけとなったのは、本学部卒業生であられます、滝澤三郎氏の著書「『国連式』世界で戦う仕事術」に出会ったことです。

私自身、外交に携わりたいと思い始め、とりわけ難民問題に強い関心を持ち始めたのは、中学生の頃でした。その折に知人がこの本を紹介してくれました。やはり滝澤氏と同様に、私も国公立で国際関係論の専攻があることが、大きな入学の決め手になりました。

今では私のバイブルのようになっています。自分の置かれた環境の中で最善を尽くすこと、また必要とあらば、自分から自分の求める環境を形成していくこと、そのための努力を惜しまないことを日々の目標にしています。

冒頭でも触れましたが、この1年間では様々な初体験がありました。中学高校と寮に入ってはいましたが、完全な一人暮らしはこれが初めてです。

タイムマネジメントも100%自分で行わなければなりません。様々な行政関連の手続きも四苦八苦しながら何とかこなしました。持病の発作で救急車のお世話にもなりました。大量のレポートのような大学教育の洗礼を浴びたことも忘れず付け加えておかなければならないかもしれませんね。

しかし、そんな一見苦しいような体験からも必ず教訓や学びが得られると信じて、日々の生活を楽しく送っていければと、思っています。

この寄附講義に協力してくださっている全ての皆様に、有意義な学びの場を提供してくださったことを感謝します。ここで得た経験を通じ、より一層の高みを目指して、滝澤氏や寄附講義の講師の方々を始めとする諸先輩の背中に一日も早く追いつき追い越していけるよう、たゆむことなく精進を続けていきたいと思います。

2022年度ホームカミングデー開催

講演会会場の様子

3年ぶりに対面で むつめ祭と同時開催　2022年11月26日(土)

ホームカミングデーは新型コロナ対策のため中止やオンライン開催となっていましたが、2022年度は3年ぶりに対面で開催することができました。また、今回初めてむつめ祭との同時開催となり、久しぶりに多くの学生たちがいるキャンパス内を懐かしい想いで見て回ることができました。

ホームカミングデーは13：30から全学講義棟１号館301講義室にて開催されました。

始めに坂井貴文学長の挨拶。学長から、3年ぶりの対面開催を喜ばしく思うとの言葉のあと、コロナ対策や基金の活用状況、ウクライナ避難民の支援など本学の取組みを述べられました。また脱炭素化などの社会貢献の状況、他大学との連携強化やオールインワンキャンパスの利点を生かし、更なる機能強化を図って行くということなど、大学の今後の方向性についても力強く語られました。

続いて埼玉大学同窓会会長　舘逸志氏（経済学部同窓会会長兼務）は、埼玉大学の同窓生は今年10万人を超える見込みで、そのような大学に恩返しや支援のお手伝いをしていただけるようご協力をお願いしたいと述べられました。

講演会の講師はけやき会先輩の林野宏氏

今年の講演会の講師は1965年文理学部卒、本学フェローの林野宏氏でした。（株式会社クレディセゾン代表取締役会ＣＥＯ）

演題は『21世紀の社会と経営』と題して、日本と世界の問題点と課題について過去から現在まで軽妙な語り口で話され、90分間の講演は飽きることなく時間が過ぎていきました。

【21世紀の社会と経営】

Ⅰ．21世紀はAsiaの世紀か？

Ⅱ．日本経済はなぜ成長しないのか

Ⅲ．2023年何が起こるのか？

参考．日本の課題を解決する10の提案

←大きな手振りで熱演された林野氏

講演会には多くの同窓生が集まりました

当日は「むつめ祭」と同時開催。キャンパスには多くの学生＆市民が集まっていました。

教養学部棟前の広場

バンド演奏の前には人だかり

学内掲示のポスター

2022年11月26日のホームカミングデーの講演会の動画は
下記から見ることができますのでぜひご覧ください。（2時間13分）

【埼玉大学ホームページ】

「卒業生の方」をクリック⊡
「ホームカミングデー」のBOXの中の『ホームカミングデー』の文字をクリック⊡
トップページの緑の『HOMEOMINGDAY2022のタイトル』をクリック⊡
『ライブ配信のご案内』をクリック⊡
『ライブ配信はこちら』からYouTube動画で見られます。

こちらからも
アクセスできます
↓

また、2021年度のホームカミングデーはオンライン開催。その企画で作成した『埼玉大学の今昔』は27分間の動画で大学の歴史からキャンパス案内を楽しめますので、ぜひご覧ください。
今年のホームカミングデーにはぜひ大学に足をお運びいただき、母校の今をご覧ください。
ホームカミングデーの開催情報は随時けやき会のホームページでご案内していきます！

むつめ祭会場のいたるところにこんな表示が。
古い同窓生には、隔世の感がありました！

2025年 教養学部は60周年

シリーズ第2回目

教養学部の歩みをたどる

2025（令和7）年、埼玉大学教養学部は設立60周年を迎えます。そこで、これを記念して、教養学部の歩みをたどるシリーズを始めました。

昨年は、第1回として教養学部のルーツに旧制浦和高等学校（1921年創設）を取り上げました。

今回、第2回は、旧制浦高と教養学部の間を結ぶ埼玉大学「文理学部」を取り上げてみたいと思います。

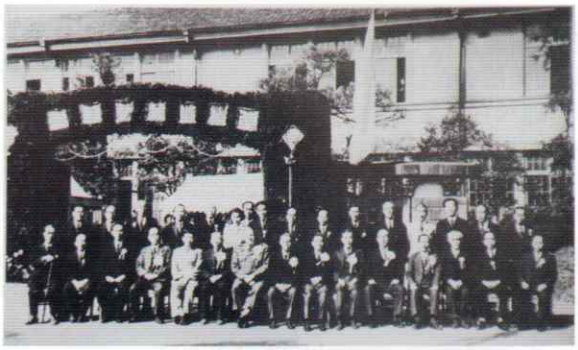
なお、本稿を執筆しようとする直前、文理学部のご卒業で埼玉大学名誉教授の山野清二郎先生から、玉稿をいただきました。文理学部について、定員に至るまで細かく書かれており、そちらを第一に読んでいただきたいと思います。

重複する箇所も出て来るかと思いますが、以下、主に『埼玉大学五十年史』（1999）に基づいて紹介します。

まず、埼玉大学文理学部は、1949（昭和24）年、文字どおり紆余曲折を経たのち、旧制浦和高等学校を母胎に設立された。

同時に、もう一つの教育学部は、埼玉師範学校と埼玉青年師範学校を母胎に作られ、新制埼玉大学は2学部体制で、スタートした。

校舎は、文理学部が、北浦和駅前にあった旧制浦高のキャンパス（埼玉県立近代美術館、北浦和公園、常盤小学校等の区域）をそのまま引き継ぎ、教育学部は、現在の浦和市役所庁舎等の区域にあって、別であった。



開学式記念写真

文理学部の講座組織を見ると、設立当時の様子がよく分かる。

文理学部は、文学科16講座、理学科12講座からなり、内訳は文学科が、人文科学系として、哲学2、国語国文学2、漢文学1、史学2、人文地理学1、英語英文学3、独語独文学2、仏語仏文学1の各講座。社会科学系として、法律学政治学1、経済学社会学1の講座であった。

大学組織は伝統的な講座制を採用し、各講座には教授1名、助教授1名以上、講師、助手1名をそれぞれ配属させていた。

一見して分かる通り、人文科学系が中心であり、社会科学系の講座数はわずか2つしかなかった。これが、後に教養学部と経済学部につながるが、これは明らかに旧制浦高の伝統を引く継ぐものであった。

ちなみに、文理学部の理学科は、数学3、物理学3、化学3、生物学2、地学1の12講座であり、これも旧制浦高の伝統を引き継いでいた。

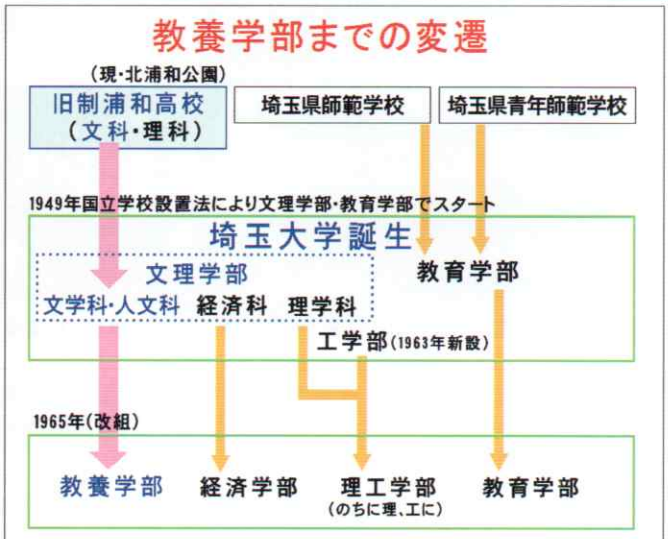
言うまでもなく、大学でいちばん重要なのは教員の質と能力の高さである。旧制浦高は東京に近いこともあって、そもそも錚々たる教官が揃っていた上に、学生も大半が東京帝大等に進学する全国有数のエリート校だった。

そこで、旧制浦高の発展的解消に伴い、教官37名中、14名が東京大学に移籍。1人が退職し、残りの22名が埼玉大学に残った。

それ故、文理学部は、大学の組織も教員の陣容も当初は、旧制浦高の伝統を色濃く残していたと言える。

学生の定員は、文学科80人、理学科80人の計160人。4学年合わせても640人であった。ところが、終戦直前の5月25日、米軍の空襲により旧制浦高のキャンパスも焼夷弾を浴び、講堂や文科系の教室など大部分の施設が焼失してしまった。

戦後、木造モルタルの二階の校舎が建てられたが、2，3年もすると廊下がきしみ、大学のイメージには程遠いものがあり、それでも学生たちは食料が乏しい中、大学で学べること自体に喜びと誇りを感じて、意欲的に学習に励んだという。放課後、学生たちの有志は、あちこちでグループごとの輪読会を開き、またドイツ語、フランス語等の原書に取り組む学生たちに付き合って、夜遅くまで指導する教官たちの姿もあったという。



その学問に対する熱気が当時どれほどのものであったかは、一例として独語独文学研究室について書かれた宮原朗先生（文理学部4回生、埼玉大学名誉教授）の回想からも明らかであろう。

「17回にわたる専攻生総数は51名と少数ながら、この中の21名が東大、東京教育大、都立大、東北大、学習院大、慶應大、立教大等の大学院を経て諸大学の教員となったほか、それぞれに高等教育界、報道・出版界、官公庁、商社、旅行社等の多彩な分野で活躍を見せて来た。」（105頁）

埼玉大学文理学部は1949（昭和24）年の開学から、1969（昭和44）年、第17回の卒業まで、延べ2007人の卒業生を世に送り出した。

過渡的な性格を持っていたことは確かであるが、教授陣は、旧制浦高の教官を中核としながら、新規採用の気鋭の教員が補充され、旧制浦高のアカデミックでリベラルな校風を引き受けながら、戦後の向学心に満ちた学風が醸成されていった。

それは明らかに、1965（昭和40）年に改組される教養学部の母胎をなすものであった。古い革

付属図書館

袋の中に新しい酒を盛るの比喩のごとく、新旧が程よく混じり合い、発酵し、新しい伝統が築かれていったと言える。

最後に、文理学部から教養学部に移籍された教員の一部を紹介したい（敬称略）。

◆哲学研究室
岩本泰波、神保常彦

◆歴史学研究室
深見秋太郎、山口栄吉
矢澤利彦

◆地理学研究室
三友国五郎、新井壽郎

◆国語国文学研究室
吉田澄夫、長谷章久

◆漢文学研究室
平田栄、田森襄

◆英語英文学研究室
金勝久、和田善太郎、西田馨

◆独語独文研究室
浜中英田、妹尾泰然、宮原朗

◆仏語仏文学研究室
武村猛、松田譲

◆経済学社会学研究室
小菅稔など

なお、後に教養学部長を2度、計6年務められた平田栄先生、仏文の主任教授、松田譲先生は、戦前から戦後、旧制浦高から文理学部、教養学部の3つの高校・大学・学部で教鞭を執られていたことを、山野先生から教えていただいた。

旧北浦和キャンパス全景（1967年頃）

↑今も残る「カイノキ（楷樹）」＜中国原産・ウルシ科＞
大正14年に旧制浦和高校の漢文科の教授が中国出向のとき、孔子廟を訪れ、墓上を覆っている大楷樹の種子を数個拾い、帰国後、播種、育苗し、記念に生物教室に寄贈し、教室前の植物園内に植えたもの。以後大切に育てられ、旧制浦高生像と並んで現在も順調な発育を続けている。（さいたま市指定天然記念物）

埼玉大学文理学部設立秘話

1949（昭和24）年、埼玉大学は、旧制浦和高等学校を母胎に文理学部が、埼玉師範学校と埼玉青年師範学校を母胎に教育学部が生まれ、2学部体制でスタートした。しかし、そこに至る経緯は紆余曲折があり、最後にどんでん返しで決まったようなところがあった。その隠された歴史秘話を簡単に紹介したい。

まず、敗戦後、「日本国憲法」（1946年）「教育基本法」（1947年）「学校教育法」（1947年）が、矢継ぎ早に制定された。それに伴って、4年制大学、男女共学制、少数者の特権的教育から、一般教養教育・学問研究・職業人養成教育の3つを柱とする米国流の大学理念が決まった。それに応じて、1948（昭和23）年7月までに、国立大学69校、公立大学24校、私立大学123校など、全国で219校が文部省に大学設置申請を行った。

しかし、最後まで揉めに揉めたのが、埼玉大学であった。

当初、旧制浦和高等学校（浦高）が、単独で大学に昇格する案（文理科大学）。次いで、千葉医科大学（現在の千葉大医学部）と浦高が連合する案（関東連合大学）、また一方で浦高、埼玉師範、埼玉青年師範を合併する案（埼玉学芸大学）など、関係教育機関（学校長）だけでなく、文部省（文部大臣）、埼玉県（県知事）を巻き込んで、激しい争奪戦が起こっていた。

その中で、いちばん有力で、各方面が了承し、具体化の寸前まで行ったのが、幻に終わった「東大合併案」であった。具体的には、東大の教養学部を駒場の他に、浦高と東京高校が合併して「東大第二教養学部」として浦和に作るという案で、当初は千葉に移転する予定であったが、埼玉県の猛烈な反対にあい、浦和に設置することになったものである。

1948（昭和23）年末の時点では、東京大学南原総長、浦高の新関校長、埼玉県の大澤知事の間で合意が出来上がっていた。ところが、翌1949（昭和24）年1月に行われた大学設置委員会の「実地調査」の結果、この合併案は2月早々には否決され、東大は教養学部を駒場にだけ置くこととなった。

急転直下とは、このようなことを言うのであろう。3月18日、大学設置委員会は、埼玉大学を含む新制国立69大学の設置認可を発表した。その間、わずか1ヶ月余り。もちろん、文理学部と教育学部の2学部体制だった。

驚いたことに、同年6月8日～9日には、第1回埼玉大学入学試験（1期校34校の一つとして）が実施されている。授業開始は、実質9月からであった。埼玉大学の開学が、いかに急ごしらえだったかが分かる。初代学長は、浦高の校長でドイツ文学の泰斗でもあった新関良三先生。

なお、浦高の教官移籍に関しては、東大合併案において全教官が東大に移ることになっていたため、東大側は予定通り東大への移籍を希望した。

新関校長は、教授会で「東大に行きたい人は東大へ、しかしこちらに残ってもいいという人は是非残ってほしい」と訴えたことが証言として残っている。実際、埼玉と浦高に愛着を感じて、埼玉大学文理学部に残った教官の方が、はるかに多かった。

私たちは、先人たちの苦労をしのび、東大ではなく、埼玉大学に旧制浦高の伝統を残そうとした先生方の努力に、改めて感謝しなければならない。

（岡田道程）

同窓生から

広く各地で活躍する同窓生からのレポート

遥かなり文理学部

埼玉大学　名誉教授
（文理学部　人文科　65年卒）
山野　清二郎

山野先生
春の叙勲で瑞宝中綬章を受章
おめでとうございます

令和４年春の叙勲で本稿筆者の山野先生はこれまでの教育研究功労により、瑞宝中綬章を受章されました。おめでとうございます。

昭和二十四年新制大学が発足した折、全国に十数校「文理学部」という名を持つ大学が誕生した。そのほとんどが旧制高等学校が昇格して成った学部であった。旧制高の中には、近くにあった大学に吸収され、教養課程を受け持つ組織になっていった学校もあったが、地方に散在していた高校は独自に学部を創設することを迫られた。

旧制高は、文科・理科に分かれ、一学年二百名規模のものが多かった。我が教養学部の前身旧制浦和高も、一学年文甲・文乙・文丙・理甲・理乙各四〇名で、総定員六百名の学校であった。

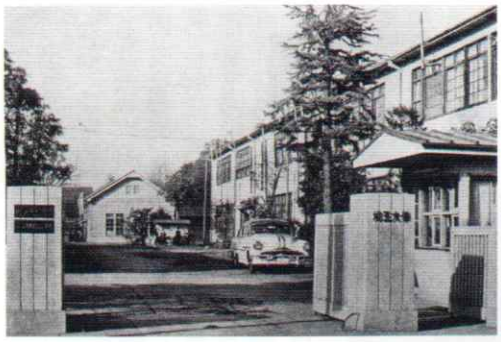
この組織のもとで学部化すると、専門学校と違って本来基礎科学教育と外国語修得を主として存在意義を有していた学校であったため、文科と理科とを合した文理学部の名称が生まれたのである。

斯くして埼玉大学文理学部は、当初、文学科八〇名、理学科八〇名、一学年一六〇名定員でスタート。

私はその十三回生であったが、この時には文学科は経済科が六〇名を占め、人文科四〇名の募集であり、この四〇名が八つの専攻（哲学・歴史学・地理学・国語国文学・漢文学・英語英文学・独語独文学・仏語仏文学）に分かれるという、今では想像もできないほど贅沢なシステムであった。

因みに理学科は数学一〇名、物理学一五名、化学一五名、生物学一五名、地学五名の専攻で、始めから専攻別に募集していた。

文学科の人文科は一・二年の間は放任されていて、三年次に専攻を決めることになっていた。別に専攻試験も無く、本人の希望通りの専攻が認められていたので、専攻生の出現しない分野もあった。


旧文理学部（北浦和キャンパス）
1967年頃

専攻前の二年間は何をしていたのかといえば、一般教養科目のほかに徹底的に外国語を叩き込まれた。

特に第二外国語は厳しいことこの上なく、私は仏語でなく独語を選択したのであるが、一週三回（文法四時間、読本二時間）授業があり、それでいながら単位は四単位。しかも文法と読本の合計点をもとに単位認定がされた。

文法の授業は進みが速く、十月末には完了。以後は小説読解。試験は年に五回あり、夏休みにはワークブックの宿題が出、一冊仕上げて提出させるという凄まじさ。第二外国語が合格できずに留年している学生もいた。

この第一第二外国語は、三年次に各専攻を決めた後の必修科目の中にもそれぞれ「講読」という形で残されており、まさに外国語重視の学部であった。

漢文学を専攻した場合は、これに中国語八単位が必修とされ、私はこの語にも挑戦したので、三年間大変であった。

授業は専攻科目については聴講の制限はほとんど無かったため、例えば漢文学の科目に理学科の物理学や生物学専攻の学生が自由選択科目取得目的で受講しに来ていたこともあって、面白い雰囲気が漂っていた。

この専攻科目には、教育学部生の受講者も多かったこともあって、授業がいつも少人数でなされていたわけではなかった。小規模の学部であったが、それだけに教職員と学生との間は極めて細やかな意思の疎通がなされ、研究室の鍵の管理は守衛所が担っていたため、いつも守衛さんと言葉を交わす間柄となった。

またそれまでの旧制高校というのは卒業生の就職という事態は無きに等しかっただけあって、先生方はずいぶんと気をもんだことと思われ、私が入学したときの文理学部長は、とにかく一所懸命勉強してくれ、金が無ければ裸足で通って来てもよい、就職は何とか面倒見るからという発言をしたのがひどく印象的であった。

旧制浦和高は新制大学発足の時、東京の第一高や東京高と共に東京大学の教養課程を担う構想のもとにあった。そのため東京大学南原総長が浦和高に視察に訪れたものの、戦時下米軍の爆撃を受けて焼けた校舎は急造の木造モルタルで凌いでいたため見栄えがせず、南原総長はあまりのお粗末ぶりに驚いたという話が伝わっている。

結局この構想は崩れ、浦和高は埼玉師範学校等と一緒になって埼玉大学となったのであるが、施設等の貧弱さは覆うべくもなく、校舎は二階建てのみ敷地内に散らばって存し、雨天時は傘をさして教室を移動した。

それどころか研究室の確保にも苦慮した。旧制高は構内に学生寮が建てられていて、浦和高のそれは「武原寮」といった。その寮を改造して研究室や一部教室に使用した。大風のときには建物が揺れて恐かった。

この建物等の劣勢さは、どんなに教職員の温かさで補っても、施設の整った新制高校から入学して来た学生には失望以外の何物でもなかったらしく、不満を訴えたり、他大学へ転学して行く仲間が結構いた。

私は粗末な施設よりも、旧制高の開放的残映の中に快適を覚え、思う存分通学し、大晦日も元日も研究室に出向いて、守衛さんをあきれさせた。

文理学部の上に大学院は勿論無く、学問を続けるには旧制大学以来の大学院に挑むしかなかった。旧制から新制へ、学校自体は素早く変身したのかもしれないが、その体質はそう変わらなかった。

大学としてはあまりにもか弱く映ったのだろうか。その後の大衆化時代の波に呑まれ、文理学部は改組という名のもとに消えていった。私は昭和四十年三月に卒業したが、その年には教養学部第一回生の募集が始まっていた。

旧制浦和高生の像（北浦和公園）
足元の下駄が当時の学生を彷彿させる→

現在の北浦和公園に残る
旧制浦和高等学校の正門

その後の移転で旧校舎はあとかたもなくなり、跡地は公園となり美術館が建った。今は旧制高以来の校門が残されているのみ。園内には旧制浦和高生の像が建つが、後身の文理学部を偲ばせるものは、校門を除き、ことごとく消滅した。

文理学部全体の同窓会も存続かなわず途絶えたまま。今やすべて記憶の中の存在となって久しい。

門柱の傍には由来を記した銘板

人類学という精神の杖で欧州でバイオリンを弾く

下斗米　千寿子
（文人　86年卒）
（文化科学　88年卒）

妄想好きの子供時代

子供の頃から妄想が大好きだった。とりわけ記憶に残っているのは、中学生の頃の下校の時、友達と分かれ一人になった後でよくやっていた、あのキラキラ系。

見えているのは演奏会の舞台袖でバイオリンを抱えて待っている私。呼吸を整えて一歩踏み出す。拍手に迎えられオーケストラと協奏曲を弾く。バイオリンを始めたばかりなのに、星のような夢を見ていた。

小学生の頃の妄想も捨てがたい。シベリア鉄道でヨーロッパに行き、そこから世界の行ける限りの果てまで行って見る、聞く、食べる、嗅ぐ、感じる。

どうやら私の妄想は宇宙空間のような垂直方向にも、地平線の彼方へと向かう水平方向にも広がっていったようだ。

「教養学部」という宝箱

埼玉大学に入学した。教養学部といういい意味で得体の知れない、何でもありの宝箱のような学部には、きっと私のツボにハマる居場所があるに違いないと思って。

果たして期待を遥かに超えて、宝箱は大学の至る所にあった。

教養部で学んだ講義の数々の中に、寮生活に、サークル活動に。その一つ一つが愛おしい体験で、どれ一つ欠いても今の私はない貴重な宝物なのだが生涯を通じての精神の杖、私を貫いて姿勢を正してくれる背骨のような文化人類学との出会いは酸素存在と同じくらい重要である。

ジンルイガク？日本や世界の奥地の端っこ、所謂辺境の研究をする学問？フィールドワーク？小学生の頃の妄想が再び自分の中で脈打ってくるのが感じられた。

2年生になり、研究室でのイニシエーションを受け、晴れて文人の学生となり、阿部年晴先生、加藤泰建先生という、望みうる最高の先生方と実に個性的な諸先輩方と同期生に恵まれて幸せな勉強の日々を過ごした。

阿部先生とはよく北浦和駅に近い居酒屋で遭遇、そこでは当時の学長の須甲先生、あるいは所属サークルのメンバーとも鉢合わせる事もあり、クロス・時間オーバーで飲み明かしたことを懐かしく思い出す。

阿部先生、加藤先生と

管弦楽団にどっぷり

サークルは管弦楽団（オケ）に所属し、以来オケにもどっぷり浸かった生活が始まった。

周囲は就活真っ只中の4年生になる頃、私はといえば、偶然知ったユースオケのオーディションになんとなく受けに行って合格、世界中から集まる若者たちで結成されるオケに参加した。

そこでの交流に感化されて、またしても妄想が始まった。そしてなぜか今度の妄想は、必ずそうなる、の確信を伴っていた。根拠もないのに、である。必ず「ここ」で暮らし、バイオリンを弾く。「ここ」とはウィーンである。

オケのツアー後に旅行で訪れたのがウィーンだった。それは、妄想の具体化の始まりでもあった。当時流行した言葉「モラトリアム時代の人間」を地で行くような生き方といえばそうかも知れない。

オケのツアーから帰国した4年生の夏に、まず考えたのは大学院進学だった。人類学は奥深く、やればやるほど物の見方が広く深く変化していく。もう一歩進んで学びたいという思いと並行して、音楽ももう少し先まで学びたい。

文化人類学、バイオリン、仕事。この悩ましい三題噺につけたオチは、教員。院修了後高校の社会科の教員となる。文化人類学で身につけた精神的な態度は、教員になってますます表に出てきた。現代社会と世界史の授業では今思えば照れ臭くなるほど直球で全てを人類学に絡めて教えようと奮闘していた。

バイオリンにかける

さて、バイオリン。仕事が忙しくなればフェイドアウトしそうなものなのに、むしろその逆。バイオリンでどこまで行けるのか試してみたい、という思いは消えるどころか大きくなる一方。そしてこれは、妄想ではなく、いつの間にか現実的な流れとなっていった。

そんな矢先、偶然にもウィーンに留学経験のある先生と出会う。彼のウィーンの先生が教えておられる市立音楽院の入試を受け、合格したら教員を辞めて留学、不合格ならそのまま教員を続ける、と覚悟を決めた。

教職を辞してウィーンに渡ったことで将来路頭に迷う事になる可能性も否めないという事より、何もせずに諦めたことで噛みしめる事になるかも知れない後悔の方が余程恐ろしかったのだ。

果たして、入試には合格した。

そしてウィーンに

当時の同僚や生徒、家族や友人たちには多大なる迷惑やら心配をかけて、かくして私はウィーンにやってきた。

部活指導などで土日や夏休み無しの教員生活から一転、自由時間24時間の生活は戸惑いだらけ。サルトルの「人間は自由の刑に処せられている」という言葉を肌で感じる毎日が始まった。

大抵の留学生が勉強を終えて日本に帰国する年代になって始めた学生生活。当然周囲の学生たちは一回り近く若く、何となく居心地が悪いような、意味のない焦りにも似た気分を味わったがそれと同じくらい、敬愛する音楽家達が生きたこの地で、彼らが歩いたであろう道を歩き、見たであろう景色を見、話したはずのドイツ語で生活すること自体が刺激的で本業以外の肌で感じる空気、雰囲気を堪能し尽くした。

生活の彩りと喜び・無力感も

私の生活に彩りと喜びを与え続けたのは案外音楽以外の要素も多いかも知れない。

持って最長2年の留学期間の見込みだったが、卒業試験とか就職など次々に新しい目標が出てきて、そのための期間延長策としてバイトもした。最初は日本人子女への家庭教師やお茶の量り売りなどだったが、徐々に友人に回してもらう演奏の仕事が増え、人脈もどんどん広がっていった。

レッスンは出稽古や自宅で数人から始めた。安定した職を得たいと仕事を探したが、EU圏国民で無いこと、来た年齢が既に採用年齢制限ギリギリだったことで定職へのハードルは高く、最終面接まで行って国籍がネックで不採用になるのには無力感を感じたものだった。

音楽学校でのレッスン

ウィーンは音楽が生活の一部

それでも、ウィーン訛りが理解でき多少話せるのは快感だった。そしてそのようになればなる程にマージナルマン的な存在感を強く自覚させられる不思議な感覚。楽しさ、喜び、充実感と疎外感、痛みが常に何らかの形で同居している、とでも言えるか？とは言え、音楽が生活の一部になりきっているこの街では、毎晩オペラや一流の演奏会があり、立見だと破格の値段で堪能できること、日本では経験し得ない教会でのミサ曲を弾くこと、演奏家への敬意の払われ方の大きいことなど、様々なマイナスを凌いで余りある楽しみ喜びは枚挙に暇がない。

オーケストラでの演奏（前列左）

音楽に生きる

2年の予定の留学はこのように延び、演奏科とバイオリン教員養成課程を卒業、今は演奏活動の傍ら音楽学校3校に定職を得、50人近くの生徒に恵まれる。

欧州人の生徒に日本人の先生が西洋の音楽を教えるという摩訶不思議で素敵な関係は良好、老若男女の生徒たちとスリリングに伴走している。

演奏活動と教えることは、車の両輪のようなもの、が私の持論である。どちらもフルに回っていなければ、前に、そして遠くまでは進めない。アンバランスでも、止まっていても先はない。そのためにも、今後はソロの演奏活動を充実させたい。

日本での演奏会

最後に開いた日本での演奏会に、阿部先生と加藤先生始め文人の仲間たちが大勢いらしてくれた事は、今でも思い出すと感激する。日々の仕事でなかなか自分の研鑽にまでエネルギーを投入し切れないのが歯痒いのだが、恩師先生方や仲間たちとあの演奏会で一つの情緒的空間を共有した思い出をバネとして、再挑戦したい。

東京での演奏会（文人の仲間と）

私の使命

教えることに関しての私の使命は演奏を通して得られる魂が喜ぶような感動を、つまり私をここまで連れてきてくれた様々な音楽体験の機会を多く作り、まだ味わった事のない音の風景を経験させたい、に尽きる。

そのためにも自分が演奏家として生きていなければ、生徒にそれを還元できないのだ。

今回会報に寄稿する機会を頂いて、図らずも自らの来し方行く末に思いを馳せることとなったが、諦めの悪さと「なんとかなる」の楽観主義に伴われてここまできたと改めて感じる。

子どもたちとチャリティ演奏会

ここに書ききれなかった数多の所謂「苦労話」の類は、異文化に昇格！それらを観察して面白がる余裕、その摩擦をある種の醍醐味と捉える感性はずいぶん鍛えられ日本にいた頃よりパワーアップ！人類学という背骨があればこそ。

そしてそれは同時に、自分や自文化を新発見、再認識する大変貴重なチャンスを頂いていることでもある。

さて、冒頭の妄想に話を戻そう。オケとの共演は長い長い年月を経て現実化、そしてウィーンにいる。妄想は現実になる可能性を十分に秘めているのだ、と分かっただけでも、長く生きていた甲斐があった。

たとえ妄想した時点では素っ頓狂で、荒唐無稽だったとしても。そしてそのジェットコースターのような日々を「面白がって」無事生きてこられたのは、人類学という精神の杖に支えられていたからこそとしみじみ思う。

これまでの全てのご縁とご恩に感謝、合掌あるのみ。ありがとうございます。

最近の活動のメインは弦楽四重奏団（カルテット）での演奏と、オケ、教会などでの演奏。
所属しているカルテットでのポートレート写真→

同窓生（佐藤寿一氏）が指揮するオーケストラ　下斗米 千寿子氏も立ち上げメンバー！

浦和フィルハーモニー管弦楽団

佐藤氏と下斗米氏

浦和フィルハーモニー管弦楽団は、指揮者・音楽監督である佐藤寿一氏らの呼びかけにより、1986年に創設されたアマチュアオーケストラ。欧州で活躍する下斗米千寿子氏もその立ち上げメンバーのひとりです。
活動拠点を埼玉県さいたま市に置き、彩の国さいたま芸術劇場（中央区）、埼玉会館（浦和区）などを主な会場として演奏活動を行なっています。

指揮・音楽監督　佐藤寿一（哲学思想　84年卒）

仙台市生まれ。埼玉大学教養学部卒業。初め哲学コースで音楽美学を専攻、後、指揮に転向。指揮を小松一彦、高階正光、前田幸市郎の各氏に師事。これまでに、山形交響楽団、ニューフィルハーモニーオーケストラ千葉(千葉交響楽団)、仙台フィルハーモニー管弦楽団、東京都交響楽団、東京フィルハーモニー交響楽団などを指揮するほか、ハンガリーの国際バルトークフェスティバルにおいてサヴァリア交響楽団を、また日韓国民交流年記念事業として韓国ソウルのカンナム交響楽団を指揮し、高い評価を受けた。また、オペラの分野では東京室内歌劇場その他オペラの副指揮、指揮や文化庁主催・歌座『うたよみざる』公演の指揮兼打楽器などを務めた。モーツァルト作曲『フィガロの結婚』フンパーディンク作曲『ヘンゼルとグレーテル』林光作曲『あまんじゃくとうりこひめ』では指揮とともに演出も担当し好評を博した。

2013年5月には、ニューヨーク・カーネギーホールで『第九』その他を指揮し、障がい者を含む日本からの合唱団と現地の合唱団・オーケストラが一体になった演奏は、満席の聴衆総立ちのスタンディングオベイションという熱狂を巻き起こす成功をおさめた。

浦和フィルハーモニー管弦楽団においては1986年の創立以来、音楽監督としてともに活動を展開しており、2001年から2005年にかけて行われた「彩の国シューベルト・シリーズ」（シューベルトの交響曲全曲演奏プロジェクト/埼玉県芸術文化振興財団=諸井誠芸術総監督(当時)=制作)の指揮、2006年の浦和フィル創立20周年記念公演『カルメン』の指揮・台本・演出などが好評を得ている。（当楽団ホームページより抜粋・転載）

定期演奏会のお知らせ

2023年5月14日(日) 14：00開演・　さいたま市文化センター
全席自由　1,500円(前売り1,000円)　　指揮：佐藤寿一

ウェーバー　祝典序曲　モーツァルト　交響曲第36番「リンツ」
ラフマニノフ　交響曲第2番

詳細はこちら＜浦和フィルHP＞→

教養学部ＯＢ中心　草野球仲間募集中！

1991年度卒業の教養学部ＯＢが中心となって立ち上げた草野球チーム「ボールドネス」が結成30周年を迎え、今年も去る１月28日に2022シーズンの納会を行いました。大学時代の軟式野球部ＯＢを中心に、上は57歳、下は31歳までの幅広い年齢層のメンバーが集まり、今でも埼大近くの荒川総合運動公園や秋ヶ瀬運動公園をホームに草野球を続けています。毎年この時期にシーズンの成績記録をまとめ、ＭＶＰを選ぶ投票などを行い、楽しく納会を行っています。

若いころはさいたま市の大会などにも参加し結構本気で活動していましたが、さすがに30年も続けていますとチームの高齢化が進み、チーム存続も危ぶまれています(笑)。転勤や海外赴任でいったん活動から離れる者もおりますが、戻ってきたときにまだチームが存続していて帰れる場所があるということはすてきなことです。先輩が後輩を引っ張ってきて若い埼大ＯＢも何年かに一度加入してくれ、なんとか試合ができるレベルを保っております。

今は楽しさ最優先で、趣味と健康づくりを兼ねて月２回年間１８試合ほどの活動を行っています。
平均年齢50歳近いおじさんチームですが、もし、これをご覧になった方で興味のおありの方がいらっしゃいましたら、ぜひ入団をご検討ください。

【地理学コース　1991年卒　浅香浩幸】
フェイスブックで活動を公開しております。→

むつめゴルフ会

むつめゴルフ会は２００６年に発足、全５学部卒業生、教職員が参加、同窓生の懇親を深めています。
他学部の先輩・同僚・後輩などと広く交流ができる少ないチャンスです。
皆さんの参加をお待ちしています。

今年は2023年11月16日(木曜日) 開催！
大宮国際カントリーにて

＜開催要項＞
・スタート　8：30頃から順次　　乗用カート、セルフプレイ
・費用　約12000円+パーティー費、賞品代3000円
・連絡先　実行委員長
手嶋　毅　t-tejima@mail.fujita-eng.co.jp
参加希望の方は9/末までに手嶋にメール連絡お願いします。

むつめゴルフ会　会長　小林千秋

むつめゴルフ会のFACEBOOKはこちら↓

いつでも誰でも参加OK！

卒業生と在学生を繋ぎ互いの成長を目指すオンラインセミナー

さきたま塾

「さきたま塾」とは‥

「さきたま塾」は教養学部生を中心に、全ての埼玉大学卒業生＆在学生へ学び＆経験を提供するオンラインセミナー。活動の概要としては、１年間に６回ほど、オンラインの「Zoom」にて、卒業生が自身の埼大時代や仕事についてプレゼンし、議論と考察を深めています。

2022年度は2ヶ月に一度のペースでオンラインで実施、いろいろなテーマで展開、多くの皆さんと交流＆見聞を豊かにすることができました。また、近代美術館の見学会や、研修ツアーも２回実施することができました。

【さきたま塾研修ツアー】

①無農薬＆有機栽培農園　視察ツアー＠福島県／6月開催

②道路標識＆金属表面処理会社（(株)日本パーカーライジング広島工場視察ツアー＠広島県／9月開催）

今年も2ヶ月に1回のペースでオンラインにて実施予定、また5月のＧＷ明けに、東京国立博物館　視察ツアーを開催予定です。多くの皆さんの参加お持ちしています。

さきたま塾　特別企画

埼玉近代美術館見学会の報告

中嶋　広国　（91年卒・社会システムコース）

けやき会主催の２０２２年５月14日（日）に行われた埼玉県立近代美術館見学会に参加しました。こちらで学芸員をしている２０２１年大学院修了のけやき会同窓生の佐藤あゆかさんが案内をしてくれました。

当日はあいにくの雨模様で参加者は少数でしたが、そのぶん質問などやりとりが多くできました。見慣れた風景となっている作品が実は世の中の出来事とダイレクトにつながっていることを再認識する機会になりました。

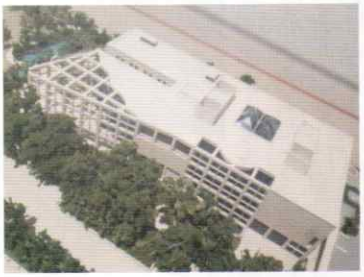
屋外には２０２２年４月から10月にかけて解体された中銀カプセルタワービルのモデルルームモジュールがあります。私はビルの解体のニュースを見るまで実際の建物だとは気づいておらず昭和から見たＳＦ的な創作建築作品だと思っていました。後日、銀座に行ったときに解体中のビルを見てきました。

また、美術館入口で横たわるふっくらした女性の銅像は、この頃ちょうど渋谷のｂｕｎｋａｍｕｒａザ・ミュージアムで開催していた「ボテロ展　ふくよかな魔法」のフェルナンド・ボテロ氏の作品でした。調べるとこの人の作品は田町にもあり、機会があれば観に行こうと思います。

作品の話を聴いて、じっくりと見直して、気になって調べてみると、そこから興味が広がっていきます

建物のエントランス付近にある四角形で区切られた構造は細胞のセルを表していると佐藤さんから説明を受けました。こちらの美術館を設計した黒川紀章氏は「人間が細胞分裂を繰り返して成長するように建築も成長・変化していくべき」という考えを持っていたとのことです。

建物の上部に突き刺さっているオブジェは建築当初はなかったもので、成長・変化として別の作家により昭和の終わり頃に追加されています。このあたり高度成長・バブル時代幕開け頃の昭和を感じます。



屋内の創作室で所蔵作品や佐藤さんの学芸員としての取り組み内容を聞きました。美術作品の鑑賞だけでなく働き手の卒業生の話を聴く機会になりました。トモトシ「有酸素ナンパ」の説明があり「それって何、誰っ」となりネットですぐに調べました。

また、「モマスうさぎ」という愛嬌のあるキャラクターがポスターや案内で活躍していて気になりました。聞くと学芸員が考案したキャラクターなのでした。

こういうちょっとした取り組みが利用者が愉しめる空間を作っていくのでは。

平成以降は耐震補強や改装はされても建物本体の成長・進化は止まってしまったように見えますが、運用面で時代に合わせて色々取り組まれています。こういうところも平成・令和の時代が反映しているように思いました。

あふれかえっている情報のなかから縁のあること、ちょっと気になる物事のつながりをたどっていくと、自分の気持ちの揺れに気がつくことがあります。こういう気づきの時間は大事にしたいです。

けやき会というつながりがきっかけになって出かけることで情報がつながっていきました。学外教養講座の企画ありがとうございました。この楽しみが皆様にも広がりますように願っています。

2022年度のさきたま塾開催内容

【4月2日（土）開催】
・ウクライナ情勢の現状と展望　　～国際政治史からの一考察

【6月4日（土）開催】
・20代のキャリア形成とその後の展望
・危機の時代を生き残る羅針盤　～西郷隆盛、渋沢栄一も学んだ陽明学

【8月27日（土）開催】
・メディア最前線2022　～地方国立大生の逆襲
・デジタル農業　　～スマート農機・進化し続ける農業の姿

世界情勢から、企業最前線、働き方、キャリア、就活・・
幅広いテーマで展開されました！

【10月9日（日）開催】
・働くって何だろう？　～常識や普通に縛られない私の考え方へ
・不器用な私の就職活動＆信託会社出向ライフ
・伝統企業のデジタル化

【11月13日（日）開催】
・地銀で過ごした12年を振り返ってみたら転職することになった
・デジタルマーケティング業界概要とプロダクトマネージャーというキャリア

【2月4日（土）開催】
・20代のうちに考えたい人生戦略　　～「個」を強くして生き残る
・想像していた銀行員像と実際の仕事内容
・働く心得　　～マンション開発を通して

東京国立博物館 視察ツアー＜5月予定＞

東京国立博物館に勤務する同窓生の案内で視察ツアーを開催予定。
詳しくは、けやき会ホームページでお知らせます！

◇さきたま塾メンバー
・塾長：田口美一（81年卒 社会システム／けやき会理事／経済アナリスト）
・事務局代表：石澤和也（10年卒 国際関係論）
・会員：いままで120名以上が参加 ～誰でも参加ＯＫです。

さきたま塾　特別企画　広島ツアー

力丸　将之　（16年卒・歴史）

ものの本によると、史上初めてツアー旅行をしたのは約2千年前のローマ人とされる。人気の観光地にオリンポス神殿など神話の舞台もあり、観光案内人も存在したというのだから、旅行という余暇とそれを巡る経済活動が止まることはないだろう。21世紀を生きるけやき会同志も負けじと、昨年9月16・17日の2日間、計8人で広島ツアーを敢行した。8人の共通点は同窓生というだけだ。

一行は早速、広島市西区のオタフクソース本社工場、続いて中山文宣氏（95年卒）が社長の株式会社日本パーカーライジング広島工場を見学した。同社は金属表面処理を中心に事業を拡大し、終戦翌年にはいち早く道路標識の製造を手がけ、モータリゼーションの波に乗ったという。作業場を眺め、私が広島へ向かう途中の山陽自動車道で見かけた標識は同社が手がけたものだと気づいた。ニッチでも、社会は掛け替えのない誰かの仕事と技術の恩恵に与っている。

晩餐はこれまた中山社長夫妻の経営するイタリア料理店「アルマンドリーノ」のフルコースだ。さきたま塾の田口美一塾長（81年卒）の膨大なコレクションから選び抜かれたカリフォルニア・ナパバレーの幻の赤ワインをグラス片手に話が弾む、弾む。まるで昨日まで同じ学び舎にいたかのようだ。

2日目は平和記念公園から始まった。学業にも仕事にも通ずるが、現地を見ないと分からないことは多い。原爆ドームは想像より小さく「よくぞ爆風に耐えられたものだ」と改めて驚かされ、原爆資料館は順路を辿るだけで1時間以上かかるが「人類史に残る惨事を語るにはあまりに手狭だ」と思わされる。

午後は呉市の「ヤマトミュージアム」を見学。高台から軍港・呉の現在と沈む夕陽を眺めた。それは映画「この世界の片隅に」の主人公・すずさんの眼差しの追体験だった。

三々五々に解散した後でふり返ると、私たちが学士以上になった今の方がよほど「修学」旅行で、この旅の軸は「戦争」と、そこから立ち上がった人類の叡智に思えた。この旅で改めて学びを修めた私たちに、これからの世界がかかっているのかもしれない。

就活ゼミ 活動報告　OBOGと現役学生の交流会開催

今年2月、新型コロナで中止していた交流会の第2回を開催。参加した学生からは就活や学生生活に、より前向きになれた！との声が聞かれました。

開催は3年ぶり

今年2月4日（土）、穏やかに晴れた冬の土曜日の午後、教養学部棟31番教室で前回から3年ぶりにけやき会主催の「OBOG交流会」が開催されました。

この交流会、社会の第一線で働く20代～30代の先輩と現役学生が交流し、就活のみならず学生生活を含め、いろいろな話をする中で現役学生の力になれればと始まった企画です。

第1回開催後、新型コロナ感染拡大で中止していましたが、多くのみなさんの熱い思いから実施することができました。

OBOGの主体は20代～

学生たちを迎えるOBOGの中心は20代から30代。学生にとっては、学内状況もよくわかるちょっと上の先輩、そして今は社会の最前線で働く面々、それぞれの就活の話も学生にとっては臨場感がありわかりやすく、かつとても参考になったと好評でした。

全学部に門戸

この交流会、もともとは就活支援の一環として企画されたものでしたが、学生の興味・関心は就活のみならず、進学や卒論、学生生活全般にわたることもあり、就活を控えた学生だけでなく、全学年を対象に開催、実際に2年生も参加されました。

またこの交流会は教養学部・大学院人文社会科学研究科に限らず、全学部生に門戸を広げて行い、他学部からの参加者もありました。

できるだけたくさん交流を

参加された先輩の、業種・経験は様々、当日はできるだけ多くの先輩たちと交流し、深くかつ幅広く話を聞けるように、面談も最低3人と行えるように、ローテーションを工夫し行いました。

参加された主な方は以下の通り。

（順不同・敬称略）

石澤　和也（クボタ）
髙木　眞慈（リクルートスタッフィング）
力丸　将之（共同通信社）
金子　将也（国立文化財機構）
〈以上教養学部卒〉
岩永　幸大（三井住友信託銀行）
吉田　達文（埼玉りそな銀行）
遠藤　早苗（三菱地所レジデンス）
四辻　明大（長瀬産業）
〈以上経済学部卒〉
渡邊　将平（フジクラ）
森　孝史（東北新社）
鈴木　裕幸（アバディーン・ジャパン）
羽生　勇介（Yahoo）
山家　愛美（プレデンシャル生命）
〈以上教育学部卒〉

会場確保は学部長が

今回の交流会開催には、教養学部長の野中先生にもご尽力いただきました。会場の教室確保や、学内の告知にもいろいろ配慮いただき、交流会当日もご参加、皆さんの様子を温かく見守っていられました。

参加学生の声

今回の交流会のあと、参加された学生の声は次のようなもの。皆さんとても満足され、終了後も教室に残り、先輩たちと話し込んでいるのが印象的でした。

【感想】

「オンラインと違い、対面の一対一はとても話しやすかった」

「それまで漠然とあった不安が解消された」

「自分が今やるべきことがわかり、やる気になった」

「会社の事業内容や仕事の中身が具体的によくわかった」

「会社間の比較ができた」等々。

次回は更に拡大～他学部と合同・大学祭でも

「就活支援」は社会に多くの仲間がいる同窓会の最大の強みです。今回の企画、大学執行部や他学部の同窓会からも高い評価をいただいており、次はぜひ他学部の同窓会・その同窓生のネットワークも生かし、加えて開催時期も、現役学生も集まりやすい大学祭にあわせてより拡大して開催してはどうかと検討がされています。

小さな就活ゼミから始まった活動が大学全体を巻き込み、現役学生にとって更に大きな力に変貌していきます。けやき会の皆さんも、より一層ご協力いただけるようお願いします。

23卒の就活を振り返って

就活ゼミ代表　髙木眞慈（18　欧米）

23年卒はコロナ禍で学生生活を送った世代です。昨年までと同様に活発に課外活動ができないせいもあり学生一人一人の経験に似通っているのを感じました。

代表　髙木眞慈

ですが、その中でも差別化できた人は、自分の言葉で自分を語れた人、つまり自分の頭で考えられた人です。この力は普段から養わないと実際に使えるようにはならず、授業を真剣に取り組んでいる人でも教養を単なる知識として学んでいるうちはこれができません。

「考える力を養うことができる学問」が教養ですが、自らテーマを決め主体的に学ぶことで、はじめて考える力を養うことができるようになります。

今年の進路支援で印象に残ったのは、留学中にコロナで帰国を余儀なくされ悔しい思いをした学生でした。

やっとの思いで実現した留学が中途半端な形で終わってしまい、行き場の無い思いを就活にぶつけたいのですが、はじめはこの理不尽に終わった経験の価値を言葉にすることができませんでした。

自ら考えて発信する力はますます求められています。進路支援を通じて後輩に大学で学んだ考える力の使い方を教えていく必要があると感じた年になりました。

就活ゼミはこんな内容　＜2023年1～2月の内容を簡単にご紹介＞

月2回日曜午前にオンラインで開催

第7回　1月8日(日)
- 就活の軸と志望企業リストのフィードバック
- ES/面接頻出質問→質問の意図理解
- OB訪問対策（アポ取り）

第8回　1月22日(日)
- 志望企業リスト→昨年度の選考の分析
- 質問の意図理解→質問の妥当解の紹介
- OB訪問対策（会話のコツ）

第9回　2月5日
- ES添削（ガクチカ、自己PR）
- 面接対策（自己紹介）
- OB訪問対策（紹介してもらうコツ）

第10回　2月19日
- ES添削（ガクチカ、自己PR）
- 面接対策（自己紹介＋ガクチカ、自己PR）
- OB訪問対策（面接練習をしてもらう）

ちなみに第10回の面接対策は・・

■面接で聞かれそうなところをピックアップ
- なんでそれをしようと思ったのか
- その結果どうなったのか？
- 取り組みは妥当であったか？　　などなど

☆面接練習☆

■まずはここを押さえよう！
- 結論から答える
- 聞かれたことを答えること
- えーと、あの、ちょっと、を言わない（テンポ悪くなる）

けやき会学生顕彰
第四回けやき賞

優秀な在学生を称え、その研究活動を後押しすべく創設された『けやき賞』。第四回からは対象を4名に広げ更に学生を後押しします。2022年は次の学生に贈呈されました。おめでとうございます！

佐藤　翔太さん（文化環境専攻）
尾藤　眞裕さん（国際アジア日本専攻）
藤本　珠笛さん（国際アジア日本専攻）
裵　智妍さん（国際アジア日本専攻）

佐藤翔太さん
埼玉大学大学院
人文社会科学研究科
文化環境専攻　1年

大学院での生活と研究活動

皆さん初めまして。埼玉大学人文社会科学研究科文化環境専攻1年の佐藤翔太と申します。

この度、けやき賞という先輩方から名誉ある賞を頂けましたこと、大変喜ばしく感じております。同時に、自分に対して研究者としての自覚がより一層芽生え、先輩方の期待を胸にこれからも精進して行きたい所存でございます。

私の大学院生活について、少しお話をさせていただければと思います。

①大学院での生活全般に関して

大学院では学部の頃とは異なり、一週間のうち自分の研究に充てる時間が多く、授業は週に4コマから6コマ程であります。

研究者として、先行研究にあたる時間を多く作り出せる現在の環境は非常に満足のいくものであると認識しております。学部時代では授業の課題に追われたり、次の日の予習等なかなか自分の時間を作り出すことは難しかったという記憶がありますが、今では自分の時間を有意義に過ごすことができていると実感しています。

一方で、自分の時間が多くあるということは誘惑にもつながると思います。なかなか気が進まず、怠惰な生活になりそうな時もあります。しかしそうした自分の弱さを認めながら、担当の先生としっかりと現状を把握し、研究の過程において今やるべきことを常に明確にしながら進めていきたいと思います。

また普段の授業にも当然ですが学部のそれとは異なる部分があります。それは内容のレベルや自由度もありますが、一番私にとってかけがえのない経験になっているのは、留学生の友人を持てたことであります。

前期の英語の授業で、中国から留学に来ている数名の学生と親しくなり、月に数回食事に行くほどに関係性を深めることができました。彼らは日本に留学に来るという高い向上心を兼ね備えていて、研究の分野は全く違うのにも関わらず、私の研究に毎回興味を示してくれます。

こうした彼らの態度は私に刺激を与えてくれ、また私も彼らをリスペクトでき、お互いにとっていい影響を与えあえる存在であると確信しています。

せっかく大学という開かれた自由と平等に開かれた教育の場に身を置く学生として、地域性を超えたあらゆるバックグラウンドを持つ人たちと交流を持つということは自分の価値観を見つめ直し、自他ともに尊重できる最高のきっかけであると思います。

②研究について

私の研究は英語教育に関するものであります。私自身、学部時代に英語科の高校1種教員免許を取得し、将来は教員として社会貢献していくために英語教育に興味を持ったのがきっかけです。

グローバル化人材の育成はもはや当たり前の前提となり、改めて強調する必要はないかと思いますが、まだまだ日本の学生が英語習得に関して抱えている問題は言語学的視点、指導法的視点ともに多く残されております。

そうした中にあって、各研究者、学校の教員はより効果的な指導法を導き出すべく日々試行錯誤しています。そこで私も英語教育の一端を担う存在として、自身が設定した英語教育に関するテーマの追及はある種の使命という風に捉えています。

具体的には日本人英語学習者が英語リスニング行為に関して抱いている困難点を明らかにしようとする試みであります。

英語によるコミュニケーション能力の育成を掲げる教育課程の中で、実践としてのスピーキング活動が授業の中で行われるようになり、授業の中で生徒が英語を産出する時間はここ数年で飛躍的に増加している傾向にあります。

しかし、本来コミュニケーションというのは双方向の情報の伝達であるのでスピーキングだけではなくリスニングも手厚く指導していく必要があります。しかし、実際の授業では体系的な英語リスニング指導というのは歴史的に見てもなかなか焦点があてられることは少ないという問題があります。

体系的なリスニング指導というのは、現行のリスニング指導によくみられる、テストで得点を取るためのストラテジー的指導ではなく、英語の音声の特徴により焦点を当てたものを意味します。

実際の授業時間内で他技能との都合も合わせながら新たに体系的なリスニング指導を行っていくにはまだまだ試験段階であり、理論も確立しているかと問われれば不透明なところがあります。

限られた時間の中で、効率よく体系的なリスニング指導を行うために先行研究に貢献していくような成果を上げられるように日々取り組んでいます。

藤本珠笛さん
埼玉大学大学院
人文社会科学研究科
国際日本アジア専攻　1年

受章のお礼

この度、けやき賞を賜りまして大変光栄に思うとともに、身の引き締まる思いです。けやき賞を設けてくださったけやき会の皆様、並びに推薦してくださった先生方に心よりお礼申し上げます。

私は三年次編入学で埼玉大学に入学して今に至りますが、編入学した当初はオンライン授業中心の学生生活だったこともあり、大学内で友人たちと顔を合わせて会話をしたり、学食で一緒に食事をしたりすることができる喜びを感じながら大学院生活を送っています。

大学院では、学部生の時よりも深い議論を交わして、さらに内容の濃い学びをさまざまな観点から得ることができており、日々ご指導くださっている指導教員の先生をはじめとする多くの先生方やお世話になっている先輩方、切磋琢磨できる同級生たちのおかげで大変充実しています。

私の研究分野は日本語学・日本語教育で、卒業論文では「ぼくら」「わたしたち」のように主に名詞に接続して複数形を表す接尾辞「ら」「たち」の使い分けについて研究し、相手に対する話者の感情と距離との観点から二つの違いについて考察を行いました。

現在は、「ら」「たち」に加えて「先生がた」「わたくしども」のように敬語としても用いられる「がた」「ども」についても焦点を当て、これらの複数形接尾辞の体系を明らかにすることをテーマに研究しています。

使用場面や丁寧さなど、状況によって臨機応変に選択されるこれらの接尾辞の使い分けを日本語学習者にもわかりやすく提示できるようにすることを目指して、日々分析を進めています。分析をしていくなかで、普段何気なく使っている日本語の不思議な点や発見に出会えるのが楽しいと感じます。

まだ発展途上の研究ではありますが、この賞に恥じぬように今後より一層研究に励み、日本語教育に寄与できるような研究にしていけるように努めていきたいと思います。

誤掲載のお詫び

昨年発行の2022年号の川田順造先生の文化勲章受章について中牧弘允氏からの寄稿につきまして誤ったものが掲載されてしまいました。大変申し訳ありません。

中牧様はじめ関係の皆様には深くお詫びいたしますとともに、正しい寄稿文を以下あらためてご紹介させていただきます。大変失礼いたしました。（編集部）

川田順造先生の文化勲章受章をお祝いして

中牧　弘允（70年卒　文人）

川田順造先生が文化勲章の栄に浴され、2021年11月3日、皇居において天皇陛下から直接、勲章を授与されました。しかも巨人軍の長嶋茂雄氏と同様、車椅子に座ったまま親授式に臨まれました。「ミスター・ジャイアンツ」にあやかるとすれば、「ミスター文化人類学」と称しても過言ではないかも知れません。

というのも、民族学・文化人類学の分野でこれまで文化勲章を受章した人物は2人いますが、梅棹忠夫（1994）は民族学、中根千枝（2001）は社会人類学だったからです。川田先生の受章理由は「西アフリカの無文字社会の調査から『口頭伝承論』という研究領域を開拓した」ことにあります。とりわけ「太鼓ことば」に着目し、非文字コミュニケーションの分析をおこなったことは世界的にみても画期的でした。さらに、「文化の三角測量」という、フランス、アフリカ、日本を定点観測するユニークな方法論を提示したことも高く評価されています。また、フランスの民族学者クロード・レヴィ＝ストロースの『悲しき熱帯』の翻訳をはじめ、同氏との知的交流でも論壇をリードしてきました。

2021年12月19日祝賀会で先生を囲んで

川田先生は教養学部の創設期に石田英一郎教授のもとで助教授に就任し、1966年から70年にかけ4年ほど学生を教育・指導しました。その謦咳に接した有志が昨年の暮れ、ご自宅に近い湯河原に相集い、フレンチ・レストランでランチの祝賀会を催しました。参集したのは須藤健一（1期）、関根増男（1期）、渡邊欣雄（1期）、中牧弘允（2期）、大越公平（4期）、峰崎進（4期）、飯塚好（5期）の7名です。川田先生は奥様に付き添われ、「安楽（肘掛）椅子の人類学者」（armchair anthropologist、「二次資料」のみを使うと批判された初期の人類学者）ならぬ「車椅子の人類学者」（wheelchair anthropologist）として現れました。身体は多少不自由になっていましたが、頭脳の明晰さと回転の速さは以前と変わりがありませんでした。

まず参加者を代表し須藤さんが川田先生の30点に及ぶ単著刊行の偉業をたたえたあと、『文化を交叉させる―人類学者の眼』（2010）に序文を寄せた恩師レヴィ＝ストロースも「現代の人類学の中で、別格の位置を占めている」と絶賛しているとの祝辞を述べ、シャンパンで祝杯をあげました。そのあと順次、川田先生との関係や草創期の思い出などを語り、楽しいひと時を過ごしました。

ひとつの話題は地理学からの「転換」でした。地理学を志望したのに、総合文化課程では文化人類学が必修で、そこに引き込まれたという話です。それには石田、川田、友枝（啓泰）という講座スタッフの熱意と魅力によるところが大きかったこと。くわえて、川田先生のおかげで、非常勤講師に山口昌男、田島節夫、坪井洋文、大野盛雄、特別講師に中根千枝、泉靖一、青木保など錚々たるメンバーに恵まれていたことが挙げられました。もうひとつのトピックは「総合鍋」のこと。これは総合文化課程にちなんで川田先生が命名したものですが、特別講師の先生方の講演後に大きな鍋でごった煮をつくり、先生方を囲んで夜遅くまで議論することがしばしばありました。それ以外にも、両神村（現、小鹿野町）でのフィールド・ワークのことなど、話題は尽きませんでした。

文化勲章を祝う会の後の旅館で

ところで、川田先生は『曠野から』（1974）で日本エッセイスト・クラブ賞を授与されたほど達意の文章でも知られ、教科書や試験問題に多く採用されています。しかも驚いたことに、教科書での採択件数は夏目漱石に次いで2位であるとのこと。「太鼓ことば」の極意をわきまえているせいか、児童や生徒の心にも打てば響く言葉をもっているようです。「出藍の誉れ」は理想ですが、不肖の弟子たちには高い壁が立ちはだかっています。学部時代のフランス語やレヴィ＝ストロースのように、今でも「ミスター文化人類学」が。

（文責：中牧弘允）

教員の異動

2022年4月1日付

【着任】

加藤有希子准教授
（共通教育研究センターから配置換）
久保茉莉子准教授
舘野　文昭准教授
東　智美准教授

【昇任】

トーヴェ・ビュールク　准教授
宮田伊知郎准教授
劉　志偉准教授

2023年3月31日付

【退職】

外山紀久子教授

ミニ同窓会に補助金を支援！

8名以上の同窓生の集まりにけやき会より1万円補助します。コロナが明けたら同期生や先生を囲む会など企画して、同窓生のネットワークを拡げましょう！

※補助金申請については事務局へメールでお問い合わせください。

2022年度　けやき会総会報告

「2022年度けやき会総会」は、新型コロナウイルス感染拡大を考慮、2022年7月2日（土）にオンラインで開催されました。なお、このオンライン総会には、来賓として教養学部長の野中先生にもご出席いただきました。

【2022年度（令和４年度）提案の活動計画】～昨年度提案、承認されたのものです。

1．総会、講演会、懇親会・・・総会のみオンラインで開催
2．教養学部教育研究支援金・・・１０万円
3．けやき会による学生顕彰「けやき賞」（今年度より4名に拡大）
4．大学寄附講座の新規開講　「国際社会の理解とキャリア形成」
　　・卒業生による社会と世界を知る実践的な講義
5．埼大生のための「就活ゼミ」（卒業生による就職支援活動）
　　・在学生、特に３～４年生のための同窓生による就職支援活動
6．「さきたま塾」オンライン講座（年６回開講予定）
7．けやき会「ホームページ」による様々な情報発信
　　・「けやき広場」「けやき商店街」「私の履歴書」「さきたま塾」など
8．会報「けやき会」の発行（2023年４月１日発行予定）
9．新入生用「けやき会パンフレット」
10．新入生会員による生涯会費納入の案内（大学及び埼玉大学同窓会と協力して）
　　・生涯会費：30,000円（５学部同窓会とも共通）
11．同期会、専攻別・地域別同窓会への支援
12．2022年版同窓会名簿発行（2022年4月25日）
13．常任理事会（オンラインで開催）
14．名簿管理
15．教養学部60周年記念にむけて（2025年）
<その他、埼玉大学同窓会（全学部）の活動として>
16．埼玉大学ホームカミングデー（ＨＣＤ）・・・11月26日開催予定
17．2022年度埼玉大学同窓会代議員総会・・7月16日開催予定
18．埼玉大学同窓会理事会・・・対面式で実施
　　・５学部同窓会の会長、副会長が集まり、埼玉大学同窓会の重要案件について審議
19．埼玉大学同窓会会長らと埼玉大学学長、副学長、理事との懇談会…未定

【2022年度（令和４年度）けやき会決算】

～昨年度提案、承認されたのものです。

2022年度　　けやき会　予算案
（予算会計期間　2022年4月1日～2023年3月31日）

	項目	2022年度予算	2021年度決算
収入の部	前回繰越金	4,577,565	3,613,497
	入会費・寄付	600,000	758,500
	入学時生涯会費	2,300,000	2,325,747
	懇親会・2次会費残金	0	0
	名簿販売還付金	20,000	0
	利子	20	17
	計	7,497,585	6,697,761

	項目	2022年度予算	2021年度決算
支出の部	HP管理費	104,500	104,500
	埼玉大学同窓会会費	300,000	292,000
	会報制作費	200,000	183,604
	会報・総会通知配送費	900,000	796,311
	総会費	0	0
	懇親会費・2次会費	0	0
	名簿配送費	20,000	2,428
	名簿制作準備作業費	100,000	0
	名簿制作・買取費	1,500,000	0
	会議費	60,000	6,390
	事務費	50,000	21,065
	口座振替手数料	0	13,898
	トランクルーム賃料	66,000	0
	ミニ同窓会費援助費	50,000	10,000
	学部教育研究支援金	100,000	100,000
	学生表彰（けやき賞）	200,000	100,000
	寄附講座費	200,000	190,000
	就活ゼミ＆さきたま塾	300,000	300,000
	*学生緊急支援基金	450,000	0
	*学部教育充実基金	450,000	0
	*けやき会記念事業積立金	900,000	0
	新名簿制作準備積立金	300,000	0
	予備費	1,247,085	0
	計	7,497,585	2,120,196

【2022年度（令和４年度）けやき会役員】

～昨年度提案、承認されたのものです。

会長　岡田道程（76哲思）

副会長　吉野　晃（80文人）　堀江　誠（81哲思）
萬年拓郎（85国関）

常任理事　飯塚　好（73文人）　飯沼麻儀（85現社）
中嶋広国（91シス）　稲葉雅美（92哲思）
平野友紀（94現社）　石原　裕（95国関）
中川和広（04国関）　石澤和也（10国関）
井下（設楽）咲紀（11国関）
羽賀美樹（13国関）　金子将也（14歴史16文化研）
宍戸由加里（18国関）　高木眞慈（18ヨア文化）

理事　山野清二郎（65国文）　林野　宏（65地理）
赤津光一（70独文）　足立　創（76歴史）
河野（高須）真澄（78歴史）
田口美一（81シス）　中山文宣（94文人96文科研）
力丸将之（16歴史）　山坂　和（19現社）
小野雄希（20芸術）

顧問　酒井憲太郎（70日文）　武井　尚（70日文）
栩木　誠（70中文）　石田義明（75国関）

監事　関根増男（69文人）

2023年度総会　7月1日(土)開催予定！

午後2時～講演会・総会
会場：埼玉大学　大学会館　講堂

今年度のけやき会総会は、対面式で開催します。対面式は３年ぶりとなりますが、コロナ感染に十分留意したうえで従来に近いかたちで開催できるよう準備を進めています。多くの皆さんの笑顔と会えますこと、楽しみにしています。

（万一、感染拡大の状況等ありましたら、中止・又はオンラインでの開催へ変更の場合もあります。その場合はけやき会ホームページでお知らせしますので、ご注意ください。）

【当日の予定】
12：30　理事会
13：30　開場・受付
14：00　講演会
15：30　けやき会総会
16：15　懇親会

2023年度けやき会総会
記念講演会

暦から解く世界の動き

14:00～大学会館

「暦やカレンダーを単なる暦法ではなく、世界を映す鏡、あるいは世界の動向を解くツールとしてとらえ、 古今東西の多様な文化や文明を比較するための有効な手段にしたいと考えています。

北朝鮮のカレンダー

春分から1年が始まる
イラン暦

講演：中牧 弘允（なかまき ひろちか）氏
（70年教養学部文化人類学コース卒）

東京大学大学院博士課程修了　文化人類学者 宗教学者
国立民族学博物館・総合研究大学院大学名誉教授
吹田市立博物館特別館長
日本カレンダー暦文化振興協会理事長、千里文化財団理事長

懇親会も開催します。16:15～

会場：生協第二食堂職員食堂
会費：4,000円予定　（ただし現役学生は無料）

コロナ感染に十分留意したうえでの開催となります。

埼玉大学基金にご協力を！

埼玉大学の学生と本学の環境の整備・充実のために、温かいご支援をお願い申し上げます。
詳細については、埼玉大学ホームページをご覧ください。
埼玉大学基金は次の３区分から構成されています。
1．埼大みらい基金
2．冠奨学金基金
3．埼玉大学修学サポート基金

「埼玉大学基金」→

最新情報は「けやき会」ホームページで！

同窓会の最新情報は、ホームページで！
『埼玉大学　けやき会』で検索できます。
上記の総会の情報や、「さきたま塾」や「就活ゼミ」の情報、「私の履歴書」など同窓生の投稿記事もあります。
また、「けやき会」への問い合せも、このホームページにて受け付けています。

スマホなら
こちら ↓

会報「けやき会」
Vol. 21
2023年4月1日発行
（年1回発行）

発行者：埼玉大学けやき会（埼玉大学 文理学部文学科・人文科、教養学部 / 大学院 文化科学研究科、人文社会科学研究科　同窓会）
会　長：岡田 道程　　編　集：堀江　誠

埼玉大学けやき会事務局　〒338-8570 さいたま市桜区下大久保255番地　埼玉大学教育機構棟3F埼玉大学同窓会事務局内
TEL/FAX :048-858-9218　E-mail : info@keyakikai.net